

然阿良忠における『十住毘婆娑論』理解

那須 一雄

本論考では、浄土宗第三祖・良忠(一一九九―一二八七)の『十住毘婆娑論』(以下『十住論』)理解の特色について、既に論じた第二祖・弁長(一一六二―一二三八)の『十住論』理解(拙稿「聖光房弁長における『十住論』理解」印度学仏教学研究 九五九―一、平成二十二年十二月)と比較する中で、その共通点について論じる。良忠の文献中『十住論』に関連した記述は、『浄土大意鈔』、『撰撰伝弘決疑鈔』(以下「決疑鈔」)・巻第一、『徹選撰鈔・上』、『往生論註』(以下「論註」)記・巻第一、等にある。

弁長と良忠の『十住論』理解の共通点としては、まず第一に、『十住論』を『十方随願往生経』と共に「十方浄土門」に属する経論としている点がある(弁長『徹選撰本願念仏集』(以下「徹選撰」)七・八四。良忠『浄土大意鈔』十・七二二、『徹選撰鈔』七・一一二―一一三(書名の後の数字は『浄土宗全書』の巻数、次の数字は頁数。以下同じ)。そして両者とも『十住論』を「易行品」を中心に理解しようとする点も共通している。(弁長『浄土宗名目問答』(以下「名目問答」)十・四〇六、四一一、『徹選撰』七・九三。良忠『徹選撰鈔』七・一一二―一一三、『論註記』一・二六〇、『決疑鈔』七・二〇六―二〇八)。これらの点は、法然(一一三三―一二二二)が、『撰撰集』二門章で「傍明往生浄土之教」として諸経論と共に『十住論』をあげ、続

いて、聖浄二門判の内実を明かすものとして、『論註』冒頭の『十住論』「易行品」の意による難易二道判を引用した(梯實圓『法然教学の研究』五四―五八頁)のに倣ったものである。だが法然は『論註』と『十住論』の難易二道を区別して考えた。則ち『論註』の難易二道判については肯定的な立場を取り、二門章に引用した。また他の法然述作でも、『論註』難易二道判に基づき仏道を示す箇所がある(拙稿「法然と曇鸞教学」宗教研究三五―一)。一方、法然は『十住論』の難易二道理解には肯定的な立場は取らず、法然述作中、『十住論』は引用されず、同論に基づき論を展開する箇所もない。『十住論』を「傍明往生浄土之教」と言うのは、「寓宗論的な立場で浄土教理解をする経論」という意味で、積極的な評価ではない。これに対し『十住論』を「十方浄土門」として位置づける弁長や良忠は、『十住論』の所説を積極的に肯定する立場に立ち、同論に基づき、自らの教学を展開する。これが第三の共通点である。この特徴の見られる箇所として、①第八「阿惟越致相品」から第九「易行品」への流れの中で、難易二道を理解しようとしている所(弁長『名目問答』十・四〇五―四〇六、『浄土宗要集』十・二二六。良忠『論註記』二五八―二五九)、②上記①のような流れで難易二道を理解する中で、『論註』の難易二道判は、菩薩が阿毘跋致(阿惟越致、不退)に到る事に焦点をあてて説かれたと見る点(弁長『名目問答』十・四〇五―四〇六。良忠『論註記』一・二五八―二五九)、③「易行品」の所説を根拠に、阿弥陀仏以外の諸仏・諸菩薩の名を称える事も易行道の範疇で捉えている箇所(弁長『名目問答』十・四〇六、四一一。良忠『論註記』一・二

六〇、『徹選抄』七・一一二―一二三、以上のような箇所がある。最後に第四の共通点として、二師共『十住論』原文に説かれるような、易行道が聖道門内の方便道として説かれているとか、難行道の下に易行道が位置づけられているという理解はせず、難行道と易行道とを同等なものとして並列的に扱った上で、易行道の方が難行道よりも勝れているという立場に立っている点(弁長『徹選抄』七・九三、『名目問答』十・四〇五―四〇七、『浄土宗要集』十・二二六。良忠『決疑鈔』七・二〇九―二一〇、『論註記』一・二六〇―二六一、『浄土大意鈔』十・七一―七二)がある。これは『論註』に説かれる難易二道判を、『十住論』に遡って解釈する二師にとり自然な立場である。

平安期の仏教説話集と〈贈与論〉

——『注好選』を中心に——

稲城正己

大乘仏教の実践の特質である〈利他行〉を、近年再評価されるようになった〈贈与論〉の視点から捉え直してみる、それが本発表の目的である。〈贈与論〉は、マルセル・モースやカール・ポランニーの理論がよく知られているが、〈贈与論〉が再評価されるようになったのは、近年顕在化してきた世界的規模での環境破壊や経済的破綻からの脱却に示唆を与えてくれると考えられるようになったからである。しかし彼らは、〈贈与〉を社会の構成原理としてしか見ていない。一方、今村仁司は、

人間存在の根源には自己の存在を〈贈与〉されたものとする感覚があり、その「負い目」の感覚が、自己の生命や身体を不特定の相手に〈贈与〉するふるまい(自己贈与)を喚起するのだという。しかし、人間が存在し続けるためには、自己の生命のすべてを〈贈与〉することは不可能である。自己の生命を分割して〈贈与〉すること、生命を労働によって産み出される〈モノ〉に転化して「負い目」を返済することが生きるということになる。仏教では前者を〈捨身〉といい、後者を〈布施〉と呼ぶ。これらは、仏教テクストのなかで釈迦菩薩の本生譚として叙述されているが、日本の仏教説話集のなかでは、どのように描写されているのか。この問題について、一一世紀末―一二世紀初頭の成立とされる『注好選』を素材として考えてみたい。

『注好選』三巻は、上巻が宇宙創生神話・中国の聖なる王の登場と事物の起源・学問と立身・儒教的な孝子譚、中巻が釈尊の本生譚・釈尊在世中の靈験・仏滅後の弟子の行動、下巻が動物のアレゴリーという特異な構成をもつ。上巻には儒教的な〈自己贈与〉が、孝子の〈自死〉として叙述されているが、父や自分を死に追いやったものに復讐するための〈自死〉も見られる。〈自己贈与〉が社会化・制度化されると、自己の生命を犠牲にして他人の生命を奪う復讐を招くことになる。それは、〈自己贈与〉が義務化されると、自己と他人の生命の〈交換〉へと変質することを意味している。孝子譚に先行する王の出現と善政に関する第三―一六話は、一見、仏教とは何の関係もないように見える。だが、人間の安穩のために社会や制度が作られたにもかかわらず、それが人間間の闘争を惹起するという世